

## 飾り窓の女たち

### ——連鎖倒産の危機迫る——

3日間の交渉が終わり、山田専務とラハバート氏にやっと笑顔が戻った。

夕食にはまだ早いので、市内見物でもしますか？

ラハバート氏がわたしに尋ねる。

普通の観光コースじゃない毛色の変わったところを見たいですね……。  
王室とか、ダム広場とか、運河などは前に見学しましたから。

えーと。ではちょっと目先の変わったところへ案内しましょう。お二人には興味ないかもしれないが、これも社会見学ですから……。

ラハバート氏がいたずらっぽく笑う。

日本企業S社は、オランダのラハバート社に、長年家電製品を輸出してきた。ラハバート社はヨーロッパ全体をカバーする代理店である。ここ数年、同社の経営は一進一退だった。最近になり系列会社が経営危機に瀕し、連鎖倒産しかねない状態になった。

S社の山田専務とわたしは、代理店契約の見直しの交渉のため、急遽アムステルダムに飛んだ。

### ——オランダ領のペーパーカンパニー——

ラハバート社の本店は、オランダ領アンティスのキュラソーにある。

キュラソー島は南米ヴェネズエラから75キロほどの沖合いにある、長さ60キロメートル、幅10キロメートルの、珊瑚礁に囲まれた小さな島である。

租税回避のためのペーパーカンパニーが多い。おそらくラハバート社も、キュラソーの法律事務所が書類上の本店になっているだけで、実体はない。

オランダの会社だからといって安心は禁物。こんな会社を相手にしては、いざというときに、売買代金を回収することは絶望的。判決を得て強制執行しようにも、実体のないペー

パーカンパニー相手では不可能である。

今回の公算危機を機会に、S社は今後の取引の担保として3億円を預託するよう要求した。

もちろんラハバート氏は即座に拒否。

彼は「契約有効期間中にこのような改訂交渉を持ち出す事はおかしい」と譲らなかった。

60代半ばで古ツワモノの山田専務も「ペーパーカンパニーを相手に取引をする以上、担保がなければ危なくて今後は取引できない」と強硬姿勢。

3日間の交渉の後、わたしたちの帰国も目前に迫ってラハバート氏もやっと折れ、売買の頭金30パーセントを今後は60パーセントに引き上げることで合意した。

もとより、わたしたちは高額の担保金を取れるとは思っていなかったのも、取引条件の改訂で妥協。双方の痛み分けである。

#### ——オランダ流現実主義——

オランダというと、チューリップ、チーズ、木靴で有名で、日本人には農業国のイメージが強い。だが、実はヨーロッパでも屈指の生活水準を誇る先進国である。

かつてオランダは、東インド会社を拠点にして世界貿易の主導権を握り、通商国家として栄華を極めた。オランダ人は忍耐強い航海者であった。合理的で几帳面な商人でもあった。

国際通商に従事した商人にとっては理想よりも現実が重要だった。

いまでも多く国民が複数の外国語を操り、国民性は極めて現実的、合理的である。

わたしもオランダ企業を代理したり相手にしたことが何度かあるが、なかなか面倒なクライアントであり、相手方である。思考の回路が日本人とは全然違う。時々、その身もふたもない現実思考に、啞然とすることがあった。

そういえば、1993年に世界で初めて「積極的安楽死」を合法化したのもオランダだった。

「患者がいかにか苦しんでいようと、医者が積極的に薬物を投与して患者の命を絶つべきではない」という根強い理想論も勿論あった。

建て前論や理想論は一見俗受けするが、それはしばしば現実からの逃避の代名詞にすぎない。

オランダ議会が積極的安楽死を容認した背景には、年間2000人以上に安楽死が実施されてい

る現状があった。

翻って日本では、「消極的安楽死」さえ認めない風潮にある。それが十分議論をした上での結論ならよい。だが「医者 of 使命は患者の延命を図ることにある。安楽死を施すのは医者 of 敗北である」という建て前論で終始してきたのが実情。

その結果、患者に対し無駄な人工呼吸や心臓マッサージなどを行い、医者は患者の命を長らえることで自己満足する。

安楽死とは違うが、尊厳死をわたしは肯定していたので、当時の日本の議論には物足りないものを感じていた（追記：後に還暦になった時、わたしは日本尊厳死協会に入会した）。

### ——「シャチョーサン コンバンワ！」——

ラハバート氏が案内したのは、アムステルダムでも最も古い地区にある、旧教会の裏手の歓楽街だった。

そこでは、タテ・ヨコ3メートル四方のショーウィンドーが道沿いに何十と並び、その中から超ビキニ姿の若い女たちが道行く人を手招きする。噂に聞く「飾り窓の女」たちである。陽はまだ明るかったが、有名な観光スポットとあって、外国からの観光客が多い。中年のアメリカ人らしい夫婦が、手を組んで冷やかしながら見物している。

わたしたちを日本人と見て、飾り窓の女がカタコトの日本語で愛想よく話しかける。

シャチョー（社長）さん、コンバンワ！

豪傑の山田専務が、英語と日本語のちゃんぽんで、ちょっかいを入れる。

I am not a シャチョーさん。I am a センムさん。

カーテンがかかっているブースは「営業中」とのこと。白人、黒人、東洋人と人種は様々である。ある者はスラリと伸びた脚をことさら強調し、ある者は長い髪をまさぐりながらポーズを決める。

「社会見学」を続けていると、時にハッとするような美人に出会う。昔活躍したシルヴァ・コシナという、旧ユーゴスラビア出身の美人女優を彷彿とさせる。

とりとめもない事を考えていると、ランバート氏がニヤニヤ注意する。

飾り窓の女には3つのタブーがあります。

写真はとってはいけません。カーテンのかかっているブースを覗いてはいけません。

「女装の男性」もいるので注意が必要です。男性と分かっても料金は払わなければいけません。

クワバラ、クワバラ。こんな美形が男だなんて…。

### —— 目先の現実主義 ——

ラハバート氏の話聞きながら、わたしはさすがにとまどった。オランダのような文明国で

こうもあからさまに性が売買されているとは…。これほど大規模に売春を公認する国は少ないのではないか？

わたしの思いとは別に、彼はあっけらかんと話し続ける。

女性たちの相場は1回5～6千円くらいです。1日10人から20人くらい客をとるが、1週間に1回病気のチェックをするんでまず安心です…。

ただ、ここの女たちは下層クラスで、一流の女たちは客のリクエストで直接ホテルに出むくんですよ。

しかし、こうも公然と売春を認めるのは、その弊害も大きいのでは？

わたしは、注意深く言葉を選び質問した。

いやその点はほとんど問題はありません。ギャングが介入するよりずっと安全です。

売春を禁止するとかえって地下に潜って、病気が蔓延してしまう。

女たちは、このブースを借りて営業しているいわば自営業というわけです。

彼女たちは客を自由に選り好みできるんですよ。

自営業などは建前だろう。実態は違うに決まっている。

「禁止すれば地下に潜るから、合法化して規制する」。一見もっともらしいが、それでは背

後にある貧困と格差は永遠に変わらない。

実際には、自営業の彼女（彼？）たちの窮状に目をつぶっているだけだろう。目先の現実主義に惑わされているのではないか。

ラハバート氏の考えは甘い。そうは思ったが、いっても詮ないことで、わたしは黙っていた。

#### ——理想と現実のはざままで——

弁護士は、私情を交えず対象を冷静に観察することが重要な資質の一つ。この世に存在するものは、たとえそれが不正であれ、悪徳であれ、邪悪であれ、すべてを直視する必要がある。悪徳と善行とは、しばしば同じコインの表と裏にすぎない。

そうは分かっているが現実主義というのは、よほど注意しないと、目の前の現実流され、行き過ぎてしまう。

飾り窓の女たちを見学した体験は強烈だった。白日の下の性の売買。しかもカーテンを下したブース内での性の取引き…。なんともあからさまである。一種異様な世界だった。

わたしも現実主義者のつもりだったが、理想を忘れないようよくよく注意しなければならない。

確かに、理想論を振り回すだけでは、現実の弊害はなくせない。

だが、売春を「公認することの弊害」と「禁止することの弊害」の比較衡量が簡単にできるわけもない。現実主義というものの、それは机上の空論ではないか？

理想を捨てる結果になっては、現実との<sup>てい</sup>体のいい妥協に墮落してしまう。

そのことを肌で感じた。

飾り窓の女と安楽死では、その意味合いは全く違うが、わたしはオランダと日本の思考形式のあまりの違いに考え込んだ。

人間の負の現実を直視する民族と、建て前論に終始し現実から逃避する民族。

現実の弊害を理性で制しようとする民族と情緒に流される民族。

それぞれの制度には社会的、歴史的背景があり、優劣を一概に論じられないが…。

今回の見学は並の観光とは違い、後々まで考えさせられる「社会見学」だった。

.....  
2021 年 6 月追記：驚いたことにオランダ、ドイツ、ベルギーなど、今でも売春を認めている国は少なくない。100 カ国のうち、違法とするものは 35 カ国、合法ないし制限的合法とするものが 65 カ国に及ぶ (Procon/Encyclopaedia, Britannica による)。